

体育科

1 育成したい「思考力」

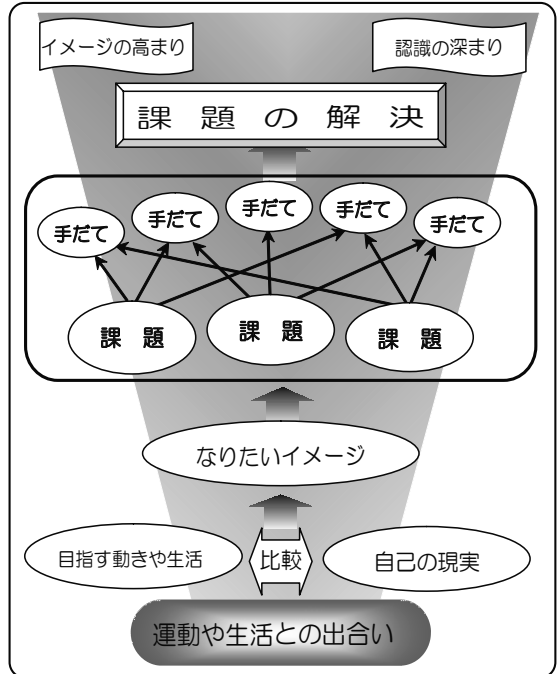
目指す動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、適切な課題を設定し、課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

○ 目指す動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、適切な課題を設定する力

「適切な課題を設定する力」とは、目指す動きや生活と自己の現実の有り様を比較し、なりたいイメージを描きながら、それを基に、どこに自己の課題があるのかを考える力である。

その力を育成するためには、運動や生活をしていく中で、実際に試したり、映像や観察等で振り返ったりすることにより、自己の現実を明確に認識しておくことが必要となる。なぜなら、基準となる自己が不明確ならば、目指す動きやよりよい生活との比較から描く「なりたいイメージ」が曖昧になり、自己の課題も明確にならないからである。このように、自己の現実を明確に認識することは、「適切な課題を設定する」上で、大きな意味をもっているのである。

この適切な課題を設定する力は、後の課題解決の手だてを選んだり、見出したりする力につながるものである。



【体育科「思考力」モデル図】

第2学年「リズムにのっておどろう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】
全身を使って踊るための課題を設定する力

リズムに乗って踊るリズム遊びでは、同じ動きを繰り返したり、動きが小さかったりしても、「うまく踊ることができている」と判断してしまうことが多い。目指す動きと今の自分の動きを比べ、自己の課題をとらえる際に働くのが、本「思考力」である。

本実践では、ペアで全身図に動きを書き残しながら踊りを確認する学習を行う。このように動きを全身図で確認することで、多く動かしている部位と、動かしていない部位があることに気付くことができる。このようにして、自己の現実を明確にし、動かしていない部位を動かそうと自らの課題を設定する力が上記「思考力」である。

第3学年「めざせ 台上前転名人」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】
台上前転において、「スムーズに回ることができない」「着地がうまく決まらない」といった失敗の場面から課題を見出すことができる力

台上前転が成功しないのは、失敗した場面の動きだけが課題であるととらえがちになるためである。そこで、本実践では、着地の場面ですまずいている友達の動きを、理想のモデルと比べて気付いたことを話し合わせ、思考様式「前の動きに目を付ける」を手がかりに、失敗の原因が着地より前の場面にあることを確認していく。そして、個々に失敗の原因をとらえ直し、自己の課題を見出していくのである。このように、目指す動きと照らし合わせながら失敗の場面から課題を見出していく力が本「思考力」である。

○ 課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

これは、課題に対して、アナログン^{*1}や過去の生活場面を想起したり、その際用いた手だてを生かしたりして、課題の解決に向かっていく力のことである。例えば、「跳び箱の開脚跳び」で考えてみると、「腕を支点として体重移動をするには？」という課題に対して、「馬跳び」というアナログンを想起したり、「腕の支持によって腰を高くするには？」という課題に対しては、過去の遊びから「カエルの足打ち」を想起したりして、手だてを見出していくのである。

また、目指す動きや生活を具体的に分析して、自己が補う点を明確にし、手だてを見出すことも考えられる。自己の現実と照らし合わせて、跳び方の美しさに関する「腰の高さ」よりも、踏切から着手までの「体の投げ出し」に関する練習方法を見出すような思考がこれに当たる。

この「思考力」は、保健領域でも同様である。「けがの防止」で考えてみると、「学校内でのけがを少なくするには？」という課題に対して、過去の生活を振り返り、改善の手だてを見出していく。つまり、「廊下を走らないようにしよう」といった行動面や「隠れた危険を見つけよう」という環境面からの防止策を見出していくのである。

なお、本校体育科では、学習対象についての経験が少ない場合には、解決の手だてそのものを見出す力よりも、教師の提示したいくつかの選択肢の中から自分に合ったものを選ぶ力を育成することを重視している。

第3学年「つないでねえ ～キャッチバレーボール～」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

キャッチバレーボールにおいて、得点が取れない・相手に多く得点されるという課題を解決するために、よりよい攻め方・守り方を選んだり、見出したりする力

ゲームでは、勝つためにどうすれば失点を抑え、相手より多く得点できるか考える事が大切である。その際に働くのが本「思考力」である。

本実践では、「得点ができない」「相手に多く得点される」という課題が設定された後に、解決のための手だてを見出すことを目指す。そのためは、うまくいった動きから解決のための手だてを見出すことが必要である。動きを振り返ることを通して、思考様式「役割ごとの動きを工夫する」を見出し、チームの作戦の中に取り入れ行った。このように、チームに応じた攻め方や守り方を選んだり見出したりする力が上記「思考力」である。



【チームの作戦を立てる】

第5学年「心元気・体元気」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

不安や悩みを解決するための、自分に合った対処法を見出す力

従来、不安や悩みの解決の仕方を考える際には、できるだけ多くの対処法を見つけ出させることを重視する傾向があった。そのため、何を手がかりに考え、自分の生活の中でどう生かすことができるのかを、吟味したり整理したりしないまま、雑多にとらえてしまいがちであった。その際必要となるのが本「思考力」である。

本実践では、「不安や悩みの対処法を、心と体の関係図に表す学習」により、心と体のつながりを意識させることで、その両方から見ることの必要性をもたせることができた。このように子どもたちが、これまでの経験や、趣味、性格等も考慮しながら、自分に合った対処法を見出していく力が上記「思考力」である。



【関係図に表す】

*1 その運動につながる「動きのもと」のこと。例えば側方倒立回転のアナログンとしては、体を支持する動きとして手押し車、逆さになる動きとして壁倒立等がある。